



|       |       |       |       |       |       |        |       |       |        |       |       |       |       |      |       |       |      |       |       |        |       |       |      |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|------|-------|-------|--------|-------|-------|------|
| 1     | 2     | 3     | 4     | 5     | 6     | 7      | 8     | 9     | 10     | 11    | 12    | 13    | 14    | 15   | 16    | 17    | 18   | 19    | 20    | 21     | 22    | 23    | 24   |
| 西村光高  | 内山徳太郎 | 宇原孝司  | 林 辨吉  | 渡辺磯次郎 | 西村寅吉  | 森 豊三郎  | 佐藤豊回  | 中西政愛  | 小橋久圓   | 村上八十九 | 八木左一郎 | 大目方金夫 | 望月嘉一郎 | 中出堂知 | 牧野真郎  | 岡崎新彌  | 富田坐藏 | 須知老遠  | 海野恒三郎 | 大河内庶次郎 | 澤田謙雄  | 本多保治  | 鈴木堂義 |
| 25    | 26    | 27    | 28    | 29    | 30    | 31     | 32    | 33    | 34     | 35    | 36    | 37    | 38    | 39   | 40    | 41    | 42   | 43    | 44    | 45     | 46    | 47    | 48   |
| 永井定益  | 渡辺喜三郎 | 近藤忠進  | 高塚健太郎 | 野村水馬  | 渡辺 純  | 岡田奎衛   | 片岡定八  | 高取与次  | 角田明士進  | 有田龜吉  | 中山謙造  | 松田徳藏  | 岸田久潔  | 前田文八 | 熊代岩五郎 | 永井嘉太郎 | 田中繁造 | 西野堂茂治 | 松宮政友  | 磯島勘治郎  | (宮主家) | 中塚嘉十郎 |      |
| 49    | 50    | 51    | 52    | 53    | 54    | 55     | 56    | 57    | 58     | 59    | 60    | 61    | 62    | 63   | 64    | 65    | 66   | 67    | 68    | 69     | 70    | 71    | 72   |
| 森安之治  | 江藤煥太郎 | 田中政知  | 平野喜馬太 | 矢吹善之助 | 中尾七六  | 中山和右工門 | 熊代親造  | 小高登喜太 | 高橋與造   | 渡川散之進 | 森田千舟丸 | 森安静夫  | 宮本建治郎 | 福垣能信 | 遠藤恕之助 | 荻野忠治  | 西村安雄 | 矢井吉之助 | 西田喜惣  | 宮田琢磨   | 五十嵐勲  | 大橋善吾  | 前安之助 |
| 73    | 74    | 75    | 76    | 77    | 78    | 79     | 80    | 81    | 82     | 83    | 84    | 85    | 86    | 87   | 88    | 89    | 90   | 91    | 92    | 93     | 94    | 95    | 96   |
| 谷國仙次郎 | 坪井清内  | 山内喜之太 | 草野繁吾  | 子湯義尚  | 森 良太郎 | 柴田小六   | 八代 泉  | 三木定太郎 | 高塚治道   | 名倉吉居  | 松下百治  | 渡辺 栗夫 | 久保田定郎 | 大森 貢 | 岡野平治  | 三宅貞雄  | 西田芳英 | 熊代英次郎 | 大辻吉三郎 | 板野兵右門  | 回富康淑  | 相野保貞  | 三宅兵吉 |
| 97    | 98    | 99    | 100   | 101   | 102   | 103    | 104   | 105   | 106    | 107   | 108   | 109   | 110   | 111  | 112   | 113   | 114  | 115   | 116   | 117    | 118   | 119   | 120  |
| 宇野第三郎 | 中村全三郎 | 中村環勝  | 河内良輔  | 高塚祐治郎 | 和田隆之助 | 富永藤左門  | 春日英治郎 | 赤松 嵩  | 保田臣義   | 城戸 貢  | 中山乙造  | 野沢道夫  | 佐野 基  | 浅尾尚郎 | 野田貞治郎 | 岡原友政  | 宮田 亮 | 鈴木高長郎 | 保田臣孝  | 岩月清武   | 野口理喜治 | 相野房造  | 坪井金吾 |
| 121   | 122   | 123   | 124   | 125   | 126   | 127    | 128   | 129   | 130    | 131   | 132   | 133   | 134   | 135  | 136   | 137   | 138  | 139   | 140   | 141    |       |       |      |
| 春日彦英  | 桐戸伸正  | 浦野厚連  | 高原 繁  | 三本泥夫  | 西村老番  | 西部淳吉   | 平井廣治  | 牧浦保祐  | 多田兵左工門 | 川村力也助 | 徳田富廣  | 上原 操  | 町田成夫  | 石原 務 | 谷 武   | 兼松権九郎 | 近藤勇福 | 岡原政純  | 角田在潔  |        |       |       |      |

○ 板倉家侍帳

明治二十三年十一月

御年寄二百石 森岡喜多右衛門  
 御用人 二百石 津久井助右衛門  
 御用人 二百石 関原 功  
 御用人 二百石 渡辺 壽吉  
 御用人 二百石 津久井助右衛門  
 御用人 二百石 福田 興市  
 御用人 二百石 永井新五左衛門  
 御用人 二百石 鈴木傳右衛門  
 御用人 二百石 徳田又兵衛  
 御用人 二百石 三宅 純  
 御用人 二百石 渡辺竹次郎  
 御用人 二百石 上阪万兵衛  
 御用人 二百石 春日 武助  
 御用人 二百石 中村彦兵衛  
 御用人 二百石 野村喜三郎  
 御用人 二百石 澤田多治右衛門  
 御用人 二百石 難波誠兵衛  
 御用人 二百石 廣井雄右衛門  
 御用人 二百石 本多 肇

御守子居取次頭五十俵 野田源之助  
 御取次 五十石三人扶持 名倉藤之助  
 御取次取振 五十石三人扶持 足立 陽助  
 御徒取頭 五十石三人扶持 海野 幸雄  
 御徒奉行吟味奉行即奉行 八木庄一郎  
 御徒奉行吟味奉行即奉行 大河内九右衛門  
 御徒取頭格御若役士志三人扶持上原茂右衛門  
 御之間席 五十石三人扶持 高原 繁  
 御医師 十五人扶持 岡 昌青  
 給人目付 十二人扶持 森 田 昌  
 給人目付 五十石三人扶持 岩 月 年  
 給人目付格 十石三人扶持 谷 甚右衛門  
 御取次 五十俵 柳井 興兵衛  
 御取次 五十石三人扶持 能 勢 小  
 御取次 五十石三人扶持 矢 井 宇兵衛  
 御取次 五十石三人扶持 前 島 宗之助  
 御取次 七十石三人扶持 岡 喜惣  
 御取次 八十石三人扶持 板 浦 保祐  
 御取次 五十石三人扶持 日 中 幸太郎  
 御取次 五十石三人扶持 鈴 木 勇次郎  
 御取次 五十石三人扶持 江 木 要人  
 御取次 五十石三人扶持 三 木 松之助

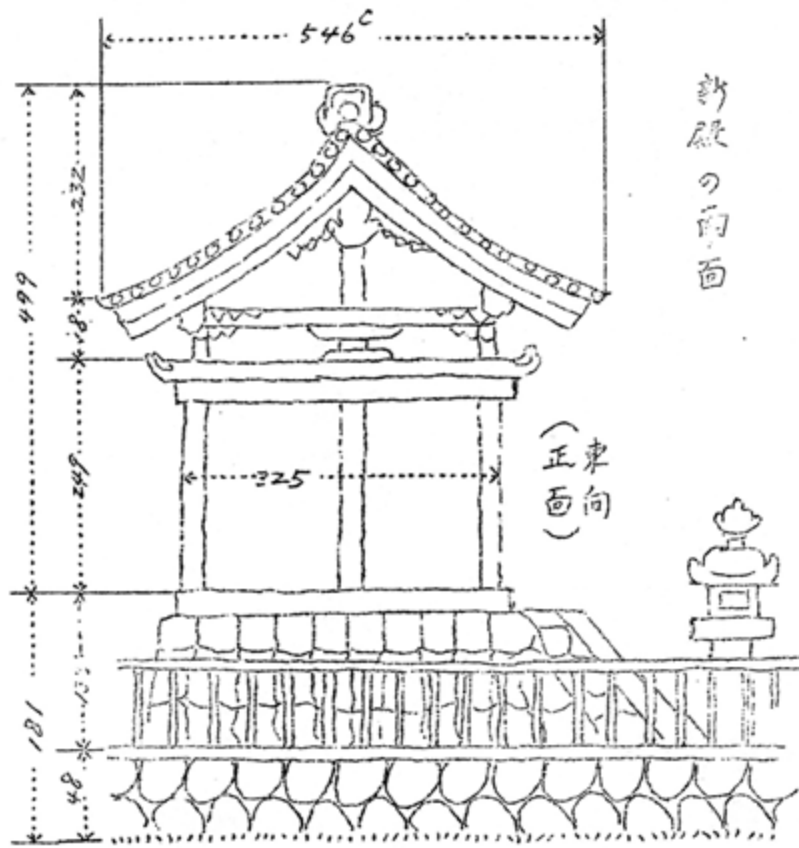
御近習給人 三人扶持 渡辺 喜三郎  
 七十石扶持 石 福川 惠平次  
 外様給人 九十石三人扶持 近藤 彦右衛門  
 五十石三人扶持 川村 鉄三郎  
 十石三人扶持 中村 金三郎  
 五十石三人扶持 近藤 喜五郎  
 八十石三人扶持 望月 喜三郎  
 九十石三人扶持 柳 芳三郎  
 十石三人扶持 須知 良太郎  
 八石三人扶持 中村 珉助  
 十石三人扶持 山崎 林助  
 外様給人取扱 御近習給人並 永井 喜一郎  
 八十石二人扶持 浦野 惣次郎  
 (禄高不明) 八石三人扶持 根山 道順  
 八十石三人扶持 西村 金次郎  
 十石三人扶持 和村 安次郎  
 (禄高不明) 五十俵 官本 連次郎  
 野田 茂次郎  
 岡本 養軒  
 山内 都六郎  
 草野 徳左衛門  
 桐野 元三郎  
 春日 英次郎  
 大塚 政治

外様給人並 八十石三人扶持 熊代 小平治  
 九十石三人扶持 高塚 松太郎  
 七十石三人扶持 中村 鉄太郎  
 八十石三人扶持 内山 新兵衛  
 九十石三人扶持 石原 善七郎  
 七十石三人扶持 遠藤 嘉兵衛  
 八十石三人扶持 野崎 良兵衛  
 七十石三人扶持 近藤 善三郎  
 六十石二人扶持 上阪 九郎  
 五人扶持 野田 貞次郎  
 御近習中小姓取扱 七十石三人扶持 西村 峰五郎  
 御近習中小姓 七十石三人扶持 八代 敦右衛門  
 外様中小姓 七十石三人扶持 保田 敦右衛門  
 七十石三人扶持 澤田 武蔵  
 六十石三人扶持 上原 武  
 七十石三人扶持 大森 安吾  
 八十石三人扶持 佐野 直次郎  
 七十石三人扶持 近藤 善兵衛  
 七十石三人扶持 西山 茂次郎  
 七十石三人扶持 中野 源次郎  
 保内 徳良助  
 河野 徳良助

外様中小姓取扱 七十石三人扶持 浅尾 牧太郎  
 八十石三人扶持 柴田 小六  
 六十石三人扶持 角田 陽一郎  
 七十石三人扶持 荒木 伴太夫  
 六十石三人扶持 手野 音左衛門  
 六十石三人扶持 岡田 敏藏  
 六十石三人扶持 林 権右衛門  
 六十石三人扶持 坂井 嘉吉  
 六十石三人扶持 新田 嘉平  
 六十石三人扶持 高塚 龜吉  
 六十石三人扶持 谷野 熊太  
 六十石三人扶持 宇野 鉄之助  
 六十石三人扶持 小橋 登衛助  
 六十石三人扶持 高屋 忠助  
 六十石三人扶持 守屋 孝司  
 六十石三人扶持 三木 辰之助  
 六十石三人扶持 内山 徳太郎  
 六十石三人扶持 平井 条右衛門  
 六十石三人扶持 森田 柳庵  
 六十石三人扶持 佐治 柴策  
 六十石三人扶持 野沢 兵衛  
 六十石三人扶持 原野 安太郎  
 六十石三人扶持 桐野 修藏  
 六十石三人扶持 馬場 平兵衛  
 六十石三人扶持 関原 理善助  
 六十石三人扶持 竹村 五郎  
 六十石三人扶持 熊代 岸五郎  
 六十石三人扶持 松下 作之助

外様上無給 窪 三宅 村権四郎  
 御近習上無給 御徒士目付 五人扶持 足立 善八郎  
 御徒士目付 四十石三人扶持 西海 金太郎  
 御徒士 四十石三人扶持 神田 松太郎  
 御次坊主 (禄高不明) 四十石三人扶持 村上 一太郎  
 御徒士 四十石三人扶持 西村 安助  
 御徒士 四十石三人扶持 岡崎 庄助  
 御徒士 四十石三人扶持 岸田 久三郎  
 御徒士 四十石三人扶持 内田 久三郎  
 御徒士 四十石三人扶持 富田 新左衛門  
 御徒士 四十石三人扶持 林 吉兵衛  
 御徒士 四十石三人扶持 清水 豊助





新殿の正面

と呼び、米、坤、中の間も同様層の上ではきびしい制限が加へられるのである。この習慣は現在でも行はれ家屋の新築或は改造などには将来の繁栄を願つて必ず陰陽家に設計の図面を示して可否を問ひていようである。科学的なこととは別に、清山神社の神殿には重昌、重矩父子の時代の遺物が殆んど保存せられていゝ。これは奈良の正倉院の御物が聖武天皇時代の御遺物と等しいものである。神殿は外部を厚い白壁にて塗りつくし空庫を兼ねた一見土蔵造りの建築様式である。規模は小さいがその特徴は稀かにみられる建物である。城跡にはたゞこの神社と周囲の石垣を遺した大部分は回廊になつていゝが、この由緒ある城跡を御社の人さへも知らないうちに有様である。心なき人によつて崩され、フレな埋減してゆくのではなからんと憂へるのである。大方の土に俟つてその遺蹟に記念碑を建て永遠に保存すべきものと考へらる。 (おわり)

セルフサービスの店  
スーパー  
**大丸百債**  
岡山市大供十字路

高級手麺  
**吉備の桜**  
電話言値一七二  
都窪郡吉備町 赤木製麺所

れる日給である。何目とは文目にして一文目は今の価格にして一錢の十分の一に当る日給である。当時の米は一升大体二錢五厘、五厘五厘、いまの米価に比較すると、ざつと五千分の一になる勤定である。

△ 奥御殿は明治の初年に岡山市の白石三九番地、もと白石村の太左屋であつた深井文平が強訴のため、母屋を焼掉はれたので、一時徳川の太左屋深井波純一郎のもとへ避難して、たゞ明治八年にその子再可へカズヨシが、この建物全部を買ひ受けて、現地に再建したのである。

△ 深井文平一再可一源六一儀一郎が当主である。

△ 藩邸の庭園は白石の今保七五五番地屋宇を衆屋という地方の豪商であつた大賀正為が買ひ受けてその庭園に移したのである。樹木は染客をかえていゝが、配石は昔のまま、である。

△ 大賀幸吉一正為一正義一善十郎が当主である。

△ 藩邸の中心になつていゝ弁天島をめぐり池を丸池という。先年塵埃の捨場となり、一部を完全に埋め立ててしまつた。他に適當な場所が見出されざる筈である。弁天島附近は現状を維持し吉備町の文化財として永久に保存すべき唯一の場所ではなからうか。とがすまされた現実のきびしい在相とはいふものの御土を受する業はしさへ文化の教養を少しでもあらわした、ものである。

△ 藩邸の東北に鎮守清山神社がある。我國では昔々回家的にも何人的にも守護神として神佛を祭祀する習慣がある。そしてその位置は家相上鬼門の方向が最もよいとされていゝ。その例は京都の御所に対して北畠山延暦寺の如く、鎌倉幕府に対して鶴岡八幡宮の如く、庭瀬藩邸に對して清山神社の如く、護國の神として尊崇したのである。鬼門とは東北から真東の間を子々始まり癸、丑、辰、寅、卯の七ツにわけ、その丑、辰、寅の方向が即ち鬼門に當る。曆によると丑は「不浄あれば家業不振、病人絶えず井戸あれば変化の凶相、カマあれば口舌の相」とあり。辰は「神佛を祀れば狂人不具者出でず、家宅を張れば病人絶えず、不浄を忌む、玄圃口階段口あれば万難交々来る」。寅は「不浄あれば主人中氣手足引つる病あり、又相續人に笑ひあるべし、神佛を祀らば大なる尊あるは他人相續の相」とあり。とあつてこの方向を家相上最も重要視し、萬事を忌み避けるのである。又その反対に當る西南は裏鬼門